



快適な座位姿勢を保つ シーティング技術

第3回 介護老人保健施設における シーティングの実践

社会福祉法人台東区社会福祉事業団 台東区立老人保健施設千束 理学療法士 古賀 洋

【シリーズ2で学ぶこと】

介護老人保健施設（以下、老健）で使われている車いすの多くは、座面と背面がスリングシートの普通型車いすです。普通型車いすの座位機能を高め、ADLを改善するには、座位補助具の使用が効果的です。第3回では、筆者が老健で行っている取り組みについて紹介し、実践につなげます。

key point

1 スリングシートのたるみ改善

スリングシートのたるみ（写真1）は、骨盤の後傾による滑り座り（写真2）、骨盤の回旋・片寄りによる斜め座り（写真3）を引き起こすといわれています¹⁾。

スリングシートのたるみは、「座ベース」（写真4）の使用である程度は改善できます。100円ショップなどで売られているジョイントマットをスリングシートに合うように加工し（写真5）、布テープで補強した後、表面と裏面に滑り止めシートを張ります。これをスリングシートに敷き、座クッションを載せるか、または

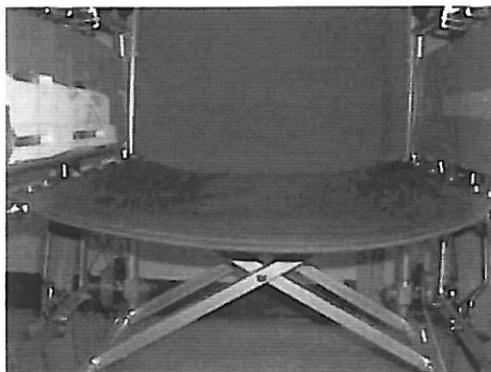


写真1 スリングシートのたるみ



写真2 滑り座り



写真3 斜め座り

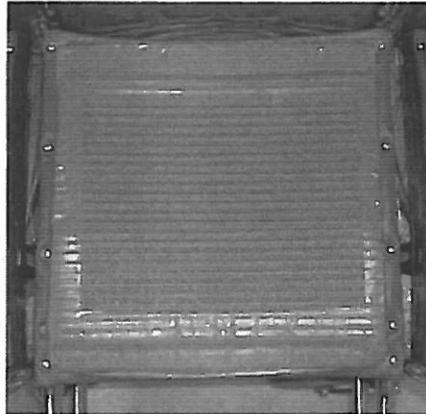


写真4 座ベース

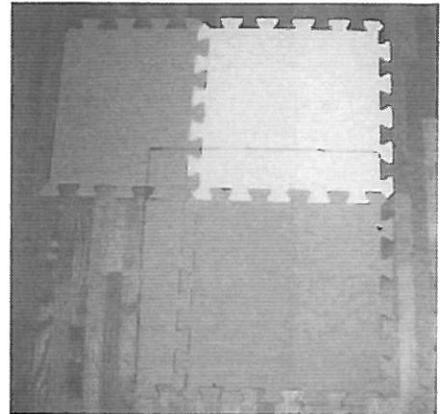


写真5 ジョイントマットの加工



写真6 合板

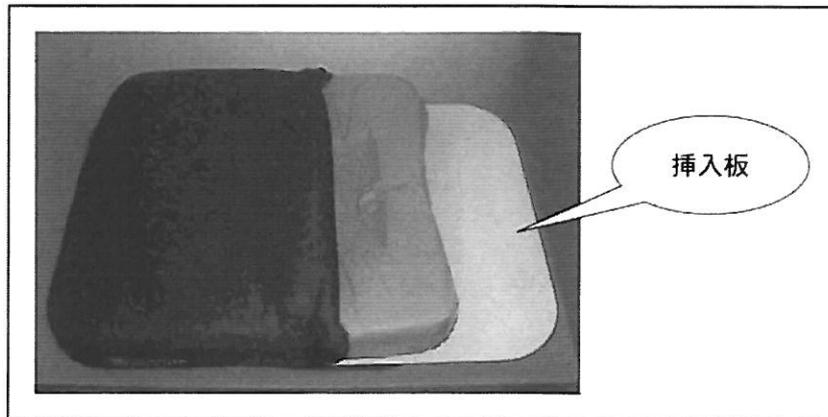


写真7 挿入板

座クッションのカバー内に挿入します。ベニヤ板などの合板を敷き、座クッションを載せる方法(写真6)もありますが、薄い座クッションでは「底つき」(座クッションが沈み込み、坐骨結節が合板に当たる)する場合もあるので、確認が必要です。座ベースも合板も、長期の使用では強度が落ちてきます。長期の使用には市販の「挿入板」(写真7)の導入を検討してください。

2 座クッションの選定

座位補助具の選定は「座位能力分類」²⁾に基づいて、車いす利用者の座位能力を評価します。

座位能力Ⅰ(座位に問題なし)レベルの利用者には、スリングシートのみを改善して、ウレタン製座クッション(写真8)を使用します。片麻痺により車いすを非麻痺側の足でこぐ利用者には、非麻痺側が低い座クッション(写真9)を使用するのも有効です。

座位能力Ⅱ(座位に問題あり)や座位能力Ⅲ(座れない)レベルの利用者には、

key point

座位能力分類
(本誌Vol.9, No.1,
P.72, 表を参照)



写真13 フットレストの不適切な位置

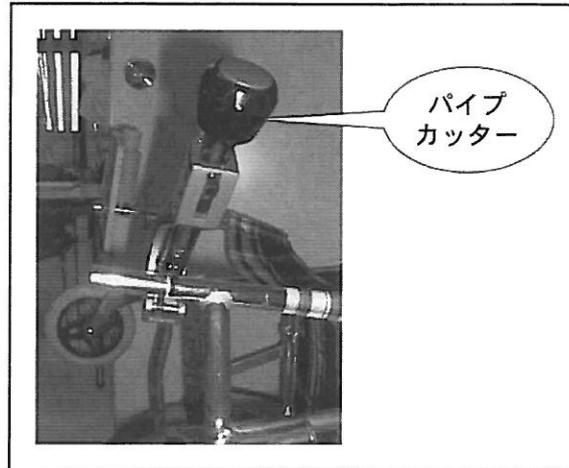


写真14 パイプカッター

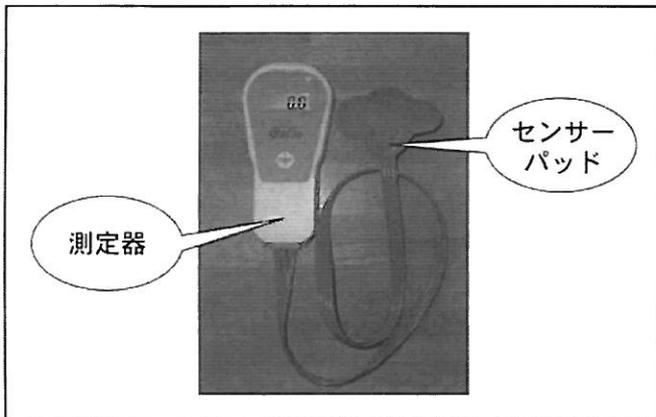


写真15 簡易体圧測定器

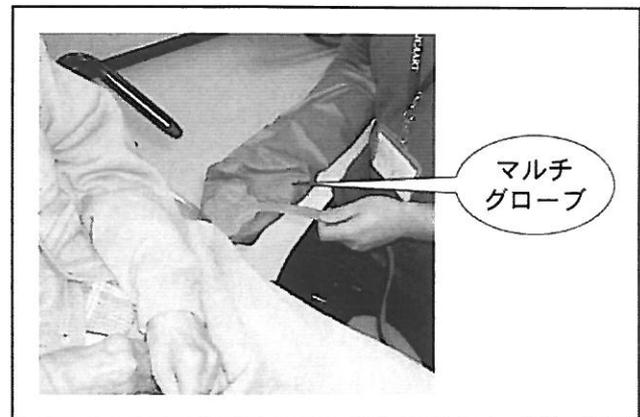


写真16 座圧の測定

3 座圧を測定する

簡易体圧測定器(写真15)を用いて、車いす利用者の座圧を測定します。マルチグローブを使って、利用者の左右の坐骨結節を触診します。両坐骨結節下に簡易体圧測定器のセンサーパッドを敷き込み、左右の座圧を測定し、平均値を出します(写真16)。車いす座位での褥瘡予防には、平均値がウレタン製座クッションで100.0mmHg以下、褥瘡予防用座クッションで50.0～60.0mmHgになるとよいです³⁾。

4 背クッションの選定

座位能力Ⅰレベルの利用者には、背シートにかかる圧力を減らし、座位を快適にする背クッション(写真17)を使用します。

座位能力Ⅱレベルで自走する利用者には、体幹を側方から支え、自走時に上肢の動きを妨げない体幹パッド付き背クッション(写真18)を使用します。

座位能力Ⅲレベルの利用者には、体幹を包み込むように支持するバックサポー

key point

簡易体圧測定器
写真15の商品は、(株)ケーブの「セロ」
<http://www.cape.co.jp/20f.html>

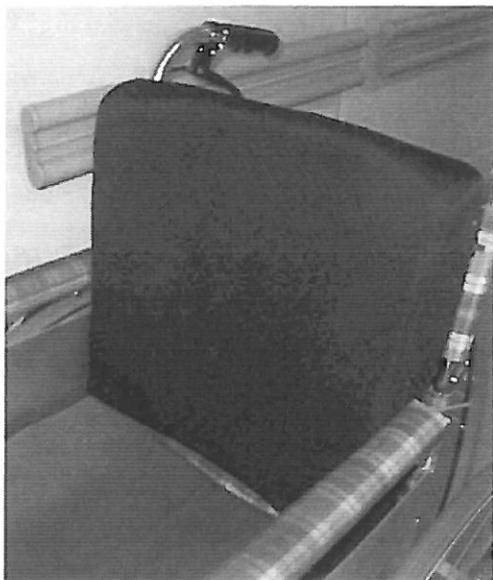


写真17 背クッション



写真18 体幹パッド付き背クッション

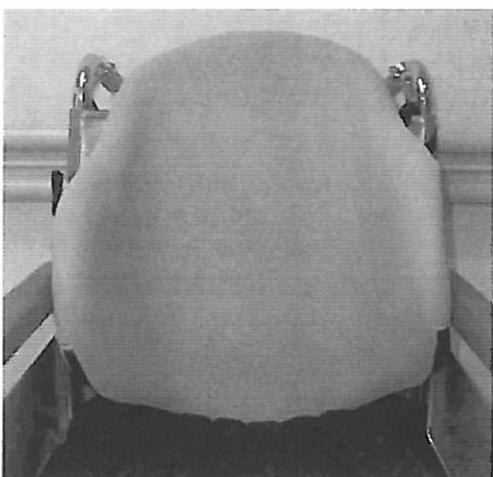


写真19 バックサポート

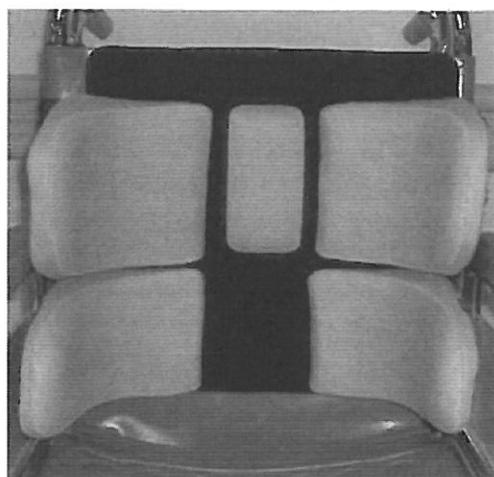


写真20 体幹ホルダー

ト（写真19）⁴⁾ や体幹ホルダー（写真20）を使用します。

体幹パッド付き背クッション、バックサポート、体幹ホルダーは、小柄な車いす利用者が普通型車いすに座る場合の寸法調整にも有効です。

5 ほかの座位補助具の使用

骨盤と体幹を支持した後に、ほかの部位の支持を行います。

頸部が伸展する利用者には、「ヘッドサポート」（写真21）⁴⁾ で頸部を正中位から軽度屈曲位に支持します。

上肢が通常のアームレストに載らない利用者には、「広幅アームサポート」（写真22）⁴⁾ を使用します。

車いす上で体幹が前傾する利用者には、「腕まくら」（写真23）⁵⁾ を使用します。

key point 

写真21 ヘッドサポート



写真22 広幅アームサポート



写真23 腕まくら



写真24 フットサポート

足部がフットレストから外れる利用者には「フットサポート」(写真24)を使用します。

6 座位能力分類に基づいた座位補助具の選び方

座位能力分類に基づいた座位補助具の選び方を(表)に示します。老健入所中に座位補助具によるADLの変化を評価して、ケアプランに反映させます。在宅復帰に当たり、機能維持のために座位補助具の介護保険レンタルを利用者と家族に提案します。

7 事例紹介

座位補助具を使用して、車いす座位とADLが改善した事例を紹介します。

表 座位能力分類に基づいた座位補助具の選び方

座位能力	座位の状況	要介護度	対応する座位補助具
I	特に姿勢が崩れたりせず座ることができる	要支援	座クッション、背クッション、広幅アームサポート
	自分で座り心地をよくするために姿勢を変えることができる	要介護1	
II	姿勢が次第に崩れ、手で身体を支える	要介護2	ずり落ち防止用座クッション、広幅アームサポート、腕まくら、体幹パッド付き背クッション、バックサポート
	自分で姿勢を変えることができない	要介護3	
III	座ると頭や身体がすぐに倒れる	要介護4	ずり落ち防止・褥瘡予防用座クッション、広幅アームサポート、腕まくら、バックサポート、体幹ホルダー、ヘッドサポート、フットサポート
	リクライニング車いすやベッドで生活	要介護5	



写真25 対応前



写真26 対応後



写真27 対応後の食事姿勢

key point 

1) 事例1

A氏、女性、85歳、認知症、ADL全介助、要介護度4、座位能力Ⅲ。

車いすの座幅が広く、スリングシート上では斜め座りや滑り座りになっていました（写真25）。

離床促進と車いす座位姿勢の改善のために、座位補助具を使用することをケアプランに示しました。

ずり落ち防止用座クッションとバックサポートを使用して、体幹を正中位に保持しました（写真26）。その結果、食事姿勢が改善し、介助力が軽減しました（写真27）。

食事摂取と姿勢の関係については、本誌Vol. 9, No.2, P.14～16を参照。



写真28 対応前



写真29 対応後



写真30 対応後の食事姿勢

2) 事例2

B氏、女性、85歳、認知症、ADL食事以外は介助、要介護度4、座位能力Ⅲ。車いす上で体幹を起こせず、アームレストにしがみついていた(写真28)。車いす座位姿勢の改善のために、座位補助具を使用することをケアプランに示しました。座クッションと広幅アームサポート(左右)を使用しました。

広幅アームサポートで両上肢が支持され、頸部と体幹が正中位に保持されました(写真29)。また、補高台を併用することで、摂食力が向上しました(写真30)。

key point

引用・参考文献

- 1) 木之瀬隆：高齢者のシーティング—車いすシーティングと座位能力分類による対応、作業療法ジャーナル、Vol.38、No.9、P.858～865、2004。
- 2) 前掲1)、P.860。
- 3) 木之瀬隆他：車いすクッションの評価法に関する検討—高齢者の褥瘡予防におけるクッションの評価方法の検討—、作業療法、Vol.23、特別号 第38回日本作業療法学会誌、P.504、2005。
- 4) 古賀洋他：環境配慮型座位補助具の開発と評価Ⅱ 試作品の評価、第19回リハ工学カンファレンス2004資料、P.159～160、2004。
- 5) 河内昌子他：環境配慮型座位補助具の開発と評価Ⅲ 腕まくら、第19回リハ工学カンファレンス2004資料、P.161～162、2004。

【執筆者プロフィール】

こが・ひろし

1999(平成11)年、東京都立医療技術短期大学理学療法学科卒業。理学療法士免許取得。台東区立老人保健施設千束に勤務。

台東区立老人保健施設千束

所在地：東京都台東区千束

設立年：1994(平成6)年 設立主体：台東区

運営：台東区社会福祉事業団

職員配置数：医師1名、看護師4名、介護職員20名、理学療法士1名

サービス：入所・短期入所(50名)、通所リハビリテーション(1日20名)

シリーズ2のワークシート

✓シーティング実践のためのチェックリスト

- スリングシートのたるみが、「滑り座り」「斜め座り」を引き起こすことを理解している。
- 座位能力分類に基づいて利用者の座位能力を評価している。
- 座位能力分類に基づいた座位補助具を選択し、使用している。
- 簡易体圧測定器を用いて利用者の座圧を測定している。

✎シーティング技術を身につけるためのスタディ

座位補助具の使用による利用者の座位姿勢，ADLの変化を評価してください。

—考え方のヒント：

- ① 利用者の車いす自走力や食事姿勢の変化などを観察してください。
- ② 利用者の感想を聞いてください（満足度評価）。
- ③ 同じ部位に違う座位補助具（体幹パッド付き背クッションと体幹ホルダーなど）を使用した時の比較をしてください。